

演題

胃腸エコーの経験から

県立宮崎病院 臨床検査科超音波センター

石橋 峰嗣 三原 謙郎

最近の超音波機器の進歩にともない、肝胆膵などの実質臓器だけでなく、胃や腸などの消化管も超音波にて観察が可能になってきた。県立宮崎病院臨床検査科超音波センターでは、この‘胃腸エコー’に積極的に取り組んでいるが、最近経験した消化管症例のなかから3例を報告する。

(症例1) 49歳、男性。主訴：右側腹部痛。腹部エコーにて、上行結腸から肝彎曲部、横行結腸にかけて腫瘤がみられた。多層同心円構造を呈しており、腸重積であった。

(症例2) 0歳2週間、男児。主訴：噴水状嘔吐。腹部エコーにて、幽門部の前壁後壁がともに肥厚した像を認めた。固有筋層の肥厚は5mm、全長は19mmであり、肥厚性幽門狭窄症が考えられた。

(症例3) 59歳、男性。主訴：血液混入の嘔吐。腹部エコーにて、胃角近傍後壁に深い潰瘍を認め、底部は膵体部に接していた。

まとめ

1例目は特異的な多層同心円構造、2例目は幽門の著明な肥厚像、3例目は潰瘍エコーが観察できた。今回は典型的な症例の経験を通して、胃腸エコーの有用性を発表する。